
ふたりぼっち

nakoso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりぼっち

【Nコード】

N7399D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

キミとボク。今この瞬間、ふたりぼっち。

「あれえ？ ユーくん、紅茶の缶は？」

キッチンの引き戸の中にもぐりこんだ彼女は、よいしょ、とその矮躯を引き抜いた。

「紅茶の缶はあ？」

「切れたよ」

ぼくはと言えばうつ伏せで、ベッドの上でごろごろと本を読んでいた。

ぺらり、ページをめくる。

「えー、飲んだの？」

「飲んじやいましたー」

「どーしてー」

「喉渴いてたから」

「紅茶はあたしが淹れるって言ったのに」

彼女の奇立ちを如実に物語る、どすどすと響く足音はベッド脇にまで近付くと、どすんと背中への重圧に変わった。

「重っ」

「吐け」

「え」

「飲んだ紅茶、全部吐け」

「吐いてもいいけど、胃酸まみれだよ？」

「紅茶だけ抽出して吐け」

「無茶言うな」

「エスプレッソ抽出で」

「もう紅茶でもないじゃん」

「吐け」

背中に跨ってなお喚く彼女はさておいて、ぺらりページをめくる。

「ね」

いともたやすく観念してくれた、彼女の体が背中に密着。肘を立てて浮かせたぼくの胸に細い腕が絡み付く。

「何読んでんの？」

「戯曲集」

「シェイクスピア？」

「お笑いです」

「お笑い？」

「コント戯曲集」

「何それ」

「コントの戯曲集……イタイイタイ」

耳を引っ張らないでください。

「ね」

今度はぼくの髪をいじりながら、彼女。

「紅茶飲んだってことは……淹れたのは？」

「ぼくだよ」

「ほんとにいい？」

「ほんとに」

「ちゃんと淹れられた？」

「淹れられたよ」

ぺらり、ページをめくる。

「で、誰に淹れてあげたの？」

「ぼくに」

「うそよ！」

ひと際高い声が非難を伴って耳を刺した。

「じゃあこの口紅は誰のよ！」

「あっちゃんでしょ」

「このマニキュアはこの女のよ！」

「あっちゃんでしょ」

「ヘアピンなんて使わないじゃない！」

「あっちゃんのですよ」

振り返らずとも、一連のやり取りを楽しんでいる表情が手に取るようにわかる。

そして決まって、こう聞いてくる。

「好き？」

だから決まって、ぼくは言うんだ。

「好き」

「いいね」

体を押し付けるように、彼女に強く抱き締められる。

もし彼女が判子ならば、今頃ぼくの背中には彼女だらけだ。

ハグが好きな彼女は、前から後ろから、いつでも抱き付いてくる。

彼女自身をぼくに写すように、何度も何度も、きつく強く。

「ね、ね」

「はあい？」

ぱらり、ページをめくるぼくの手を、彼女が止めた。

「紅茶、美味しく淹れられた？」

「淹れられたよ」

「ほんとに？」

「うそ」

「やっぱりうそじゃない！」

まだ続いてたんだ、それ。

「楽しそうだね」

「うん、すごく楽しい」

声からして躍っている彼女の手を押しやり、ぱらり。

「あっちゃんの淹れてくれる紅茶が一番です」

「素直でよろしい」

ぼくの視界を遮った彼女の手が頭を撫でてくれる。

やわらかい、彼女の手。

やわらかくて温かい、彼女の手。

撫でる。撫でる。

撫でる撫でる。

撫でる撫でる撫でる撫でる。

「こらこらこらこら」

しまいにやぐるんぐるん、ぼくの頭が振り回された。

「好き？」

「好き」

「あたしの淹れる紅茶、飲みたい？」

「飲みたい」

「じゃ、明日買ってきて」

絶対くると思った。

「いつもの店でいい？」

「いつもの店で、いつものブレンドで」

「しかと承りました」

「よし」

満足げに意気込んだ彼女はすつくと立ち上がると、もう一度だけぼくの背中を抱き締めて、キッチンに向かった。

「忘れないで買ってきてよー。あたしの紅茶が飲みたいでしょ、ユ

……ヒロくんは」

ぺらり、ページをめくって聞いていないフリ。

ユークン。彼女の、前の彼氏。

もう口に馴染んじやあって 前に、申し訳なさそうに言った彼女。

そのうち治るから、ね？ そう言うてはくれたけど。

ユークンの家には、まだ紅茶の缶があるんじゃないかい？

あっちゃんに淹れてくれるのを待っている、紅茶の缶が。ぺらり、ページを戻して、またぺらり、ページをめくる。

鼻歌まじりに調理を始めた彼女を横目で見る。

紅茶淹れるのヘタね。

カノジヨの声が三半規管で回った。

あたしの妹の方が、何倍も上手よ？

彼女は紅茶を淹れるのが上手だ。

カノジヨは男を虜にするのが上手なのだろう。

……ま、いいってことさ。

ぺらり、めくったページに書かれた「了」の文字を見る前に本を閉じる。

今この部屋には、ぼくと彼女だけ。

本を枕元に放って、足が向かう延長線上には彼女。

栗色パーマを揺らす彼女。

茶色ストレートを掻き上げるカノジヨ。

カノジヨの微笑が頭を過ぎって、彼女の鼻唄が止まった。

緩く流れる栗色パーマが振り向く前に抱き締める。

彼女とカノジヨの髪は同じ匂い。

「好き？」

決まって彼女は聞いてくるから、

「好き」

決まってぼくは答える。

ま、ま、ま。いいってことなのさ。

今はまだ、答えなんて。

わかってるのは。

今この瞬間、部屋にはふたりぼっち。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7399d/>

ふたりぼっち

2011年1月20日04時39分発行